

令和 6 年度

I 国 語

(9 時 00 分～9 時 50 分)

注 意

- 問題用紙は4枚（4ページ）あります。
- 解答用紙はこの用紙の裏面です。
- 答えはすべて、解答用紙の所定の欄に、文、文字などで答えるもののほかは、ア、イ、……などの符号で記入しなさい。
- 解答用紙の [] の欄には記入してはいけません。

注意

字数指定のある問題の解答については、句読点も字数に含めること。

次の1、2の問い合わせに答えなさい。

- 1 次の各文中の——線をつけた漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。
 また、=線をつけたカタカナの部分を、漢字に直して書きなさい。

- (1) 友人を励ます。 ——(2) 公園は憩いの場所だ。 ——(3) 農作物を収穫する。 ——(4) 自然の恩恵を受ける。 ——(5) 思いを胸にヒめる。 ——(6) 困っている友人に手を力す。 ——(7) 全国大会でユウショウする。 ——(8) モゾウ紙に発表内容をまとめる。

閣

- 2 次の行書で書かれた漢字を楷書で書いたとき、総画数が同じになる漢字はどれか。あとのア～オの中から一つ選びなさい。

ア 棒 イ 脈 ウ 輸 エ 磁 オ 版

— 次の短歌を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

- A 注1 に光の粒をまきながら川面をなでる風の手のひら

俵 万智

- B 絵日傘をかなたの岸の草にまげわたる小川よ春の水ぬるき

与謝野晶子

- C 睡蓮の円錐形の蓄浮く池にざぶざぶと鍔洗ふなり

石川 不二子

- D たぎちつつ岩間を下る渓川の濁りもうれし春となる水

太田 青丘

- E 水風呂にみずみちたればとっぷりとくれてうたえるただ麦畑

村木 道彦

- F 蜗蚪生れし水のよろこび水の面に触れてかがやく風のよろこび

雨宮 雅子

- 注1 四万十・四万十川。

- 注2 絵日傘：絵柄のある日傘。

- 注3 たぎちつつ：水が激しく流れ続けて。

- 注4 蜗蚪生れし：おたまじやくしが生まれた。

- 1 目にしたものを作りやすく形容した光景から一転して、音を印象的に表現した言葉を用いて労働のあとの何気ない作業の様子を描写している短歌はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

- 2 心情を表す言葉を用いずに春の明るい気分を表現しながら、身の回りの物の取り上げ方によつてもあたたかさが感じられる短歌はどちらか。A～Fの中から一つ選びなさい。

- 3 次の文章は、A～Fの中の二つの短歌の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あととの(1)、(2)の問い合わせに答えなさい。

この短歌は、しなやかに流れ続ける川の動きに合わせてきらめく日ざしを印象的に捉えたあとで、「I」に見立てた目に見えない空気が流れが川に軽く触れながら過ぎてゆくさまを描写することで、作者が感じ取った自然の様子を表現している。また別の短歌は、活力にあふれた春の訪れに対する祝福を豊かな感性でうたいあげている。「II」という言葉を、短歌に軽やかなリズムが生み出されるように用いると同時に、ひらがなで表すことによって作品にやわらかな感じを与えていている。

- (1) I にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から四字でそのまま書き抜きなさい。

- (2) II にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から四字でそのまま書き抜きなさい。

二 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

注1 晋の平公、鋤て大鐘を為り、工をして之を聴かしむ。
注2 (樂工たちに鐘の音を聴かせた)

皆以て調へりと為す。注3 師曠曰はく、「調はず。(どうかもう一度音程は合つてないと答えた)

之を鋤ん。」と。平公曰はく、「工皆以て調へりと為す。」と。
注4 (見抜くでしょう)(私は内心で)

師曠曰はく、「後世音を知る者有らば、將に鐘の調はざる鐘を鋤なおしてください)

を知らんとする。臣窃かに君の為に之を恥づ。」と。師涓に

(見抜くでしょう)(私は内心で)

至りて、果たして鐘の調はざるを知れり。是れ師曠の善

く鐘を調へんと欲せしは、後世の音を知る者を以為へば

く鐘を調へんと欲せしは、後世の音を知る者を以為へば

なり。(ある)

(「呂氏春秋」より)

注1 晋の平公：中國にあつた晋の國を治めていた人物。

注2 工：樂工。音樂を演奏する人。

注3 4 師曠、師涓：それぞれ、國の音樂に関する仕事をしていた人物。

1 「請ふ」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

2 次の会話は、本文について授業で話し合ったときの内容の一部である。あととの(1)～(3)の問い合わせに答えなさい。

Aさん 「平公が鐘の音を聴かせてみると、樂工たちは鐘の音程は合つていると答えたんだね。」

Bさん 「でも、師曠は音程は合っていないと言つていて、平公はどう考えたんだろう。」

Cさん 「平公は樂工たちに賛成したと思うよ。『I』と

Bさん 「こうして考へると、師曠は『II』だと言えそうだね。だから、鐘を作り直すべきだと言つたということだね。」

Cさん 「そうか。その気持ちが、『君の為に之を恥づ。』という部分に表れているということかな。」

Bさん 「そうだね。そして、師涓が現れたとき、師曠の考えていた通りの結果になつたんだね。」

Bさん 「こうして考へると、師曠は『III』だと言えそうだね。だから、鐘を作り直すべきだと言つたということだね。」

(1) I にあてはまる最も適当な言葉を、本文(文語文)中から十一字でそのまま書き抜きなさい。

(2) II にあてはまる内容を、三十字以内で書きなさい。

(3) III にあてはまる最も適当な言葉を、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア 少しの音程のずれも許さず、納得できるまで何度も音を確かめる人物

イ 演奏技術の向上のために、毎日の樂器の練習を欠かさず続ける人物

ウ 先々のことまで配慮して、必要だと思うことをしつかり意見する人物

オ 音楽のことでは他者の意見に耳を傾げず、自分の信念を曲げない人物

次の文章を読んで、あととの問いに答えなさい。

(中学二年生の白岡六花は美術部に所属している。陸上部の春山早緑とは、小学生の頃に早緑にシロクマの絵をほめられてから友人となつた。一年生の二学期、六花が、まじめに活動しない他の美術部員のことを「まじめにやらないならやめたいのに」と早緑に話したところ、その言葉に反発され、けんかになつてしまふ。二年生のある日、六花はクラスメイトの黒野良輔に話しかけられ、そこでなんかの話をした。その日の帰り道に、早緑が六花に気持ちを打ち明けてきた。)

「……もつと、もつとはやく言つてよ。」

うらみがましく、私はつぶやく。そんなことを言う資格、ひとつもないのに。私のせいなのに。何度も言おうと思つたよ。だけど、うん……やつぱりさ、こういうのって、かかるべきときつてもんがあるじゃん?」

「なに、それ。」

「一年の三学期に、決めたの。その日、六花に会いに行こうと思つた。ちゃんと話をしなきやつて。だけど、美術部に行つてもいなくてさ。小畠先輩が、体育館に行つたよ、つて教えてくれて。で、行つたんだけど、やつぱり話しかけられなかつた。」

早緑は思いだすような目をした。

「体育館で、剣道部が練習してて。ほら、ウサギ王子とかといっしょに、エビユや本多くんが大声出しながら竹刀でばしばしやつて。で、すみっこで、それが見ながらさ、一心不乱つて感じで、六花は絵を描いてた。もうさあ、眼鏡のおくで、目がぎらぎらしてて。あたし、思いだしたんだ。」

「なにを?」

早緑は照れたようになつた。六花に話しかけたときのこと。シロクマの絵がじようずだねつて、ほめたこと。六花の顔がパッと明るくなつて、それがびっくりするほどかわいらしくて。友だちになりたいつて、思つたこと。」

それから私をまつすぐに見て、言つた。

「体育館のすみで、そんなことを考えてたら——ほら、おなじクラスのさ、黒野つているじゃん? 剣道部の。幽霊部員。前髪の長い、ちょっとひねくれた感じのやつ。」

黒野くん……私の中で、見えていなかつたなにかがつながつていく。なにも言えないでいる私に、早緑はうなずいた。

「あいつがふらつと歩いてきて、あたしに言つたんだ。」

「えらいよな、白岡六花。美術部、ゆるい部活なのに、ひとりだけ毎日スケッチして、先生に意見聞いて。ほかの部員たちに煙たがられても、負けないでまじめにやつてる。」

「好きだから努力できるのか、努力できるから好きなのか……鶏が先か卵が先か、みたいな話だよな。」

あたしはうなづいて、ちいさな声で言つた。

「……六花は、絵を描くのが、ほんとうに好きだから。」

だけど、自分の声が、どこかとげとげして、いやになつた。そして、黒野のやつ、こんなことを言つたの。

「好きだから努力できるのか、努力できるから好きなのか……鶏が先か卵が先か、みたいな話だよな。」

あたし、よくわからなくつて。どういうことつて、たずねたの。

「ほら、好きだから続けられる。だからうまくなるつていうのはたしかにあるけどさ、そもそも、ある程度うまくないと、好きにはなれないじゃん? 自分はほとんどはそれほど、好きじゃなかつたのに。」

「好きなものがない人は、どうしたらいいんだろう……。」

黒野、笑つて言つた。

「ほら、好きだから続けられる。だからうまくなるつていうのはたしかにあるけどさ、そもそも、ある程度うまくないと、好きにはなれないじゃん? 自分はほとんどはそれほど、好きじゃなかつたのに。」

「好きなものがない人は、どうしたらいいのかな。」

そしたら黒野はさ、まぶしそうに六花のほうを見たんだ。

「白岡六花がコンクールで賞をとつたのだつて、ああやつて努力を続いているからだろ。」

「じゃあ、そうしたら?」

その言葉が、すごく響いた。なんだろ、いくら走つても、みんなに追いつけない自分のことを言われていたみたいに、思えた。

急に、そんなことを考えた。走ることが得意だと思つたから? たぶんそう。

「いいだろ。ちゃんと、それは努力の理由になるよ。」

「だけど、努力すれば……なんとかなるのかな。」

「ほら、好きだから、なんか、情けないなつて、自分で思つた。」

「あたしは、ほしいよ。好きなもの。得意なもの。」

「あたしは、ほんとうに走つて、ああやつて努力を続いているの。だからだろ。」

「だからさ、あたしは思つたの。」

公園のすみつこ。並んですわつたベンチ。

夕日の光を浴びて、早緑は言つた。

「やつぱり、がんばらなきやだめだつて。今、ここで逃げたくない。あたしには、まだ六花に話しかける資格がないやつて。そのときの自分は、六花に誇れるような自分じやなかつたから。だから、がんばろう、つて。次に六花と話すときは、胸を張れるような自分でいたかつたから。そうなりたいと思つたから。」

「それから、すこしずつ、あたし、陸上が好きになつた。走ることが、つていざ走ることに打ちこむ自分のことが、好きになつていた。だから。」

「だから、今のあたしがあるのは、六花のおかげ。」

「私はうなづく。「今は、じゃあ、楽しい?」

「うん。すつごく。胸を張つて、そう言えるよ。だからさ。」

なかなかおりしよう。
照れたように、でもまつすぐそつと、うなづいた。すると、早緑はふきだした。
あの日、早緑が話しかけてくれたときのことを。
そして、ついさつき、ようやく気づいたほんとうの気持ち——私の心をとらえていたシロクマの正体を。

「早緑の『ガハクじやん!』って言葉がなければ、きっと今の私もないよ。」

うなづらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。
「六花泣きやんだのはいいけど、いつもどおりになるのが急すぎるでしょ。」

超絶塙対応じやん。そう言つてけられけられ笑つている。
私ははずかしくなつて、そつと眼鏡のつるにふれる。その手を早緑が、指先でつんつんしてきた。私はあわてて手をおろす。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。
「ねえ、今日、藤棚のところで、スケッチしてたよね? 見せて?」

「……やつぱり、気づかれてたんだ。」

でも、それだけじや、だめだつたんだね。

それは、前髪の長い男子の、からかうような、だけどやさしい声。

「いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。
早緑は私のことなんてぜんぶお見通しみたいな、そんな表情で言つた。

「ねえ、今日は、藤棚のところで、スケッチしてたよね? 見せて?」

「……やつぱり、気づかれてたんだ。」

でも、それだけじや、だめだつたんだね。

そうこぼしたら、どこかから声が聞こえた気がした。

それは、前髪の長い男子の、からかうような、だけどやさしい声。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。

「六花泣きやんだのはいいけど、いつもどおりになるのが急すぎるでしょ。」

超絶塙対応じやん。そう言つてけられけられ笑つている。

私ははずかしくなつて、そつと眼鏡のつるにふれる。その手を早緑が、指先でつんつんしてきた。私はあわてて手をおろす。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。

「ねえ、今日は、藤棚のところで、スケッチしてたよね? 見せて?」

「……やつぱり、気づかれてたんだ。」

でも、それだけじや、だめだつたんだね。

それは、前髪の長い男子の、からかうような、だけどやさしい声。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。

「ねえ、今日は、藤棚のところで、スケッチしてたよね? 見せて?」

「……やつぱり、気づかれてたんだ。」

でも、それだけじや、だめだつたんだね。

それは、前髪の長い男子の、からかうような、だけどやさしい声。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

いたずらつぼく笑う早緑。急に顔が熱くなるのを私は感じた。

「ねえ、今日は、藤棚のところで、スケッチしてたよね? 見せて?」

「……やつぱり、気づかれてたんだ。」

でも、それだけじや、だめだつたんだね。

それは、前髪の長い男子の、からかうような、だけどやさしい声。

「ふふ、そのくせ、変わつてないね。」

六

次の【会話】は、ボランティア活動の案内方法について、生徒会で話し合っている場面の一部である。また、【メモ】は、ボランティア活動の内容について、Aさんが先生から聞き取ったものである。【会話】と【メモ】を読み、「ボランティア活動の内容をどのような方法で案内するといいか」についてのあなたの考え方や意見と、そのように考える理由を、あとの条件に従つて書きなさい。

【会話】



(Aさん)

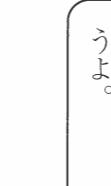
急ぎの話なんだけど、地域の方から、来週の土曜日に行われるボランティア活動への参加について、ぜひ中学校でも呼びかけてほしいと依頼があつたんだって。

それで、先生とも相談したんだけど、生徒会でこの呼びかけに協力しようと思うんだよね。これが先生から聞いた内容の【メモ】なんだけど、これを全校生徒にどうお知らせしたらいいかな?



(Bさん)

僕は、案内文書なんかを作つて、全校生徒に配るのがいいと思うよ。



(Cさん)

この内容だね。私は、校内放送で全校生徒に案内するのがいいと思うけど、どうかな。

- ○日時 6/8(土) 9:00 ~ 10:30
- ○集合場所
- わかばコミュニティーセンター構内広場
(住所: 西福島市若葉町 3-2)
- ○活動内容
- 町内のゴミ拾い、草むしりなど
- ○持ち物 軍手・水筒・タオル
- ○その他
- ・雨天中止
- ・動きやすい服装で
- ・参加は任意(希望者)

条件

2 二段落構成とすること。

前段では、BさんとCさんの意見を踏まえて、「ボランティア活動の内容をどのような方法で案内するといいか」についてのあなたの考え方や意見を具体的に書くこと。

3 後段では、そのように考える理由を、文字や音声の具体的な特徴に触ながら書くこと。

4 全体を百五十字以上、二百字以内でまとめるここと。

5 氏名は書かないで、本文から書き始めること。

6 原稿用紙の使い方に従つて、文字や仮名遣いなどを正しく書き、漢字を適切に使うこと。